

紙版 ハコブネ×ブックス vol. 5

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐwebサイトです。



ぼくはO・C・ダニエル

OC Daniel.

作者 ウェスリー・キング
 翻訳者 大西味
 出版社 鈴木出版
 発行 2017年10月
 ISBN 978-4790233282



特集

さまざまな病気とそれぞれの症状

十三歳の中学生ダニエルは自分の意思に関係なく特定のアクションを一定回数、続けなければならぬという精神的呪縛に苦しんでいます。そのルーティンをこなさなければ眠ることもできません。強迫性障害(OCD)なのです。この妄執を家族にも隠し通してきたダニエルに、君は「異常」なのではなく「特別な存在」なのだを教えてくれる人が現れます。それが学校ではまったく言葉が発しにくいサイコ・サラと呼ばれる変わりも少女であったためダニエルの心境は複雑です。どうしてサラは自分にだけごく普通に話しかけてくるのか。彼女には秘密があり、その隠し持った決意をダニエルは知ることになります。思春期の甘やかな気持ちやクールなユーモアでつなぎ留められた、魅力的な登場人物たちが織りなすYA作品の魅力満載の素敵な物語です。



僕には世界がふたつある

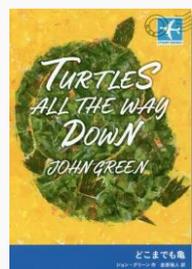
Challenger deep.

作者 ヴィンス・ヴォーター
 翻訳者 西田佳子 金原瑞人
 出版社 集英社
 発行 2017年7月
 ISBN 978-4087734898



この物語では精神疾患(統合失調症)を病む少年ケイダンの妄想世界が一人称で語られていきます。彼は二つの世界を同時に生きています。かたや友人たちとゲームを作ろうと計画する十五歳の少年のごく普通の学校生活。かたや海賊船の乗組員として、片目の船長に理不尽な指令をくだされている妄想の船員生活。船長やしやべるオウムに振り回されながら、海の深淵へと向かうケイダンは、現実の学校生活でも次第におかしくなっていく、家族や友人たちもその異常に気がつきません。治療を受けてケイダンは本来の自分を取り戻していきますが、その驚きに満ちたインナーワールドには惹きつけられます。一方で精神疾患のある彼を守る周囲の人たちの眼差しがこの物語を支えています。彼の心の迷妄を理解し、その深淵を覗こうと歩み寄る人たちの姿にも注目です。

普通、言っ**てはいけないこと**なのですが、主人公が心を病んでいたり、精神的な障壁があることで物語は面白くなります。現実の生活の中で、病気や妄執と共生していくことは非常に大変なこと**で、面白いかどうか**という基準で測るべきことではないし、語弊があります。とはいえ、そうした状況が主人公の個性を際立たせ、物語をより面白くする制約条件になることもあります。それは病気や妄執との共生によって人間としての個性が錬成されていくからだとも思います。**苦闘する姿も、またリスパクトすべき**です。読者は、どんなスタンスで病んだ主人公たちと対峙すべきか。病気とともに生きる人々には親身になるべきですが、不謹慎という気持ちを超えたところで、**病んでいる人が勇気をもって戦い続ける心のドラマ**に夢中になってもいいのではないかと思っています。もはや日常がワンダーなワールドである人々を是非、見守っていきましょう。



どこまでも亀

TURTLES ALL THE WAY DOWN.

作者 ジョン・グリーン
 翻訳者 金原瑞人
 出版社 岩波書店
 発行 2019年4月
 ISBN 978-4001164190



バクテリアによる感染症を意識しすぎて、抗菌薬が手放せない女子高生アーザ。バイ菌を過剰に恐れる**強迫性障害**に苦しむ彼女は、肉体的な接触だけでなく精神的にも距離を置いて人と関わらないようにしていました。唯一の親友であるデイジーに協力するために、幼なじみのアーザは、高額な懸賞金がかかった彼の父親の行方について情報を得ようとするうちに、次第に彼を好きになっていきます。**キスをすれば大量のバクテリアを交換してしま**うと想像して身動きがとれないアーザは、SNSを通じて彼がネット上に描く自分の姿を注視しはじめます。人と触れ合えば無害ではいられないし、**自分の毒素が人を汚す**こともある。現代的なコミュニケーションと古典的な青春の葛藤が入り混じるドラマがここにあります。



フローラ

The One Memory of Flora Banks.

作者 エミリー・バー
 翻訳者 三辺律子
 出版社 小学館
 発行 2018年2月
 ISBN 978-4092905856



十一歳の時に受けた脳腫瘍の除去手術の影響で、**前向き健忘症**という記憶障害を負った十七歳のフローラ。わずか数時間ですべてを忘れてしまう彼女は、自分の腕に書かれたメモをたよりに行動しています。新しい記憶を持てない自分を「夜のビーチで男の子とキスをした」ことを翌日にも覚えていたことで、フローラは恋する気持ちに有頂天になります。彼に再び会えたら、自分の記憶障害も治るかもしれないと思ひ、彼のいる北極圏へ**無謀な一人旅を試みる**フローラ。残された文字を頼りに行動するものの、事実と事実以外の記録が混淆し、真実かフェイクか読者さえも欺くミス터리アスな展開を迎えます。**同じ人に何度会っても初対面だと思ってしまう**彼女の無事を祈らずにはいられない、多重構造を持つ複雑な物語です。



夜はライオン (長園安浩) 偕成社 2013年



わたしが少女型ロボットだったころ(石川宏千花) 偕成社 2018年

特集
さまざまな病気



国内の児童文学作品でも、拒食症や夜尿症など、さまざまな病気と苦闘が描かれています。サイトの特集もご覧ください。